

東京女子医科大学看護学会第7回学術集会 特別講演 「臨床で見つけたもの、大学院で深めたもの」

臨床で見つけたもの、大学院で深めたもの

宮子 あづさ（東京女子医科大学大学院看護学研究科博士後期課程）

私は看護専門学校を卒業した1987年から2009年までの22年間、都内の総合病院で働いてきました。所属したのは内科、精神科、緩和ケアの3病棟。最後の7年間は管理職です。2009年4月からは精神科単科の病院で、訪問看護の仕事をしながら、本学の佐藤紀子教授のもとで学んでおります。

看護学生時代からの不器用は就職しても変わらず、最初の3年は満足に技術ができないことが悩みのタネでした。しかし、その技術がそこそこできるようになってからが、看護の難しさを思い知ったのです。このきっかけは、肺がんの腰椎転移のある男性患者さんとのかかわりでした。看護師がどんなに努力しても、その看護に満足してもらえるかどうかは、畢竟患者さん次第。そんな無力感にとらわれたのです。そしてこの患者さんを語る私の語りは、その時々の自分の在り方を反映して変わり、今もその意味づけは続いていると言えます。

また、こうした悩みを持ちながらも、私が看護という仕事に引きつけられてきたのは、人間の本当の姿が、ここにあると思ったからです。また、ひとりの女性として、経済的に自立して生きられる看護師という仕事は、私にとって非常に魅力的な仕事でもありました。戦前の息苦しい時代に青春を送った両親は、一人娘である私に、自由な生き方を勧め、自分も母親のように経済的に自立した女性になろうと思っていました。この点においても看護師という仕事は、私の希望にかなったものでした。退職を機に博士課程の学生となってからのこの2年半は、臨床で働いてきたこの25年間の問いを磨き、自分なりの結論を模索する時間でした。その過程で、私はある人の哲学を深く知ろうすることや、学問の枠組を意識しながら、深く考えることの大切さを実感してきました。

今私は、サルトル哲学を援用して、看護師の実存から看護の本質を探り、看護師として生きる意味を明らかにする研究に取り組んでいます。サルトルは、『方法の問題』の中で、「理解するとは変わることであり、自己の彼方へ行くことである」と述べています。私はこの言葉に、自分が今学んでいることの意味がそのまま書かれていると思いました。博論のテーマは、まさに私が二十数年看護師をする中で、出会った問い。これを追究し、「理解した」と思えたら、私は自己の彼方へ行けるでしょう。

看護という仕事に必要なものは知識だけではありません。それ以上に、知を探究する、知的な態度が大事なのではないでしょうか。それは、一生懸命生きて、自分にとって切実な問いと出会うことから始まります。大事なのは答えではなく、問い合わせではないか。研究の途上で今、そんな思いを強くしています。

第7回東京女子医科大学
看護学会
特別講演

臨床で見つけたもの、 大学院で深めたもの

2011/10/1（土） 15:10～16:10

東京女子医科大学大学院看護学研究科
博士後期課程看護職生涯発達学専攻

宮子 あづさ

今の暮らし：大学院生＋看護師です

■東京女子医科大学大学院看護学研究科博士後期
課程看護職生涯発達学専攻3年生

■財団法人井之頭病院勤務（非常勤）



■48歳。家族は夫（47歳：肥満）と
猫のぐう吉（♀10歳：慢性腎不全）

■都内に住む実母の世話を少ししています。……膠
原病、慢性肺気腫（在宅酸素中）、大腸がん術後、
慢性骨髄性白血病、飼い猫4匹

看護師として25年目になりました

- 1987年4月（24歳）東京厚生年金病院に就職
一般内科病棟に配属
- 1996年4月（32歳）神経科病棟に異動
- 1998年7月（35歳）主任看護師昇格
- 2001年10月（38歳）看護師長昇格
- 2003年11月（40歳）緩和ケア病棟兼務開始
- 2008年10月（45歳）緩和ケア病棟兼務解除
- 2009年4月（45歳）井之頭病院に転職 訪問看護室に配属



学士2つ＆修士1つは通信教育で

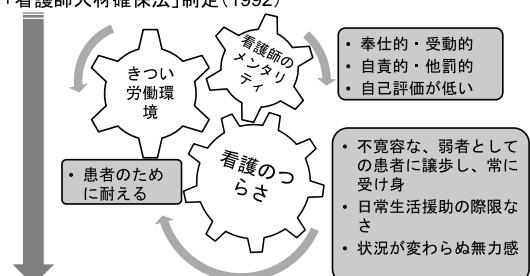
- 1983年明治大学文学部文学科日本文学専攻中退
- 1987年東京厚生年金看護専門学校卒業
- 1996年武蔵野美術大学短期大学通信教育部デザイン科グラフィックデザイン専攻卒業
- 2000年産能大学経営情報学部通信教育部卒業
- 2003年明星大学人文学研究科教育学専攻修士課程（通信教育課程）修了（教育学修士）
- 2007年武蔵野美術大学造形学部通信教育課程芸術文化学科卒業
- 2009年東京女子医科大学大学院看護学研究科博士後期課程看護職生涯発達学専攻入学

変わらぬ看護のイメージ

1. 肉体労働だけではない、知的労働だけでもない。身体を動かしつつ考えるすばらしい仕事。看護業務のひとつひとつを点検するだけではこの魅力は分からぬ。
2. 看護職には、避けて通れない「宿命的なつらさ」もある。昨今では、医療費削減のさまざまな動きが、看護のつらさに拍車をかけている。こちらはどうにかしたい。

退職直前の問題意識

少子高齢化及び医療の高度化
「看護師人材確保法」制定（1992）



語りの変化(3年目頃) 異議申し立ての時代

- 人手が足りず、ベテランが少ないから、十分看護ができない。もっと増員してほしい
- 患者さんも望みすぎ。看護師の限界も考えてほしい
- 患者さんのニーズが大きくなれば、人手が増えても追いつかない

臨床での語り—Kさんの事例

- 3年目頃かわった 50代前半の男性
- 肺がん+腰椎転移。呼吸器症状は乏しく、下肢のしびれを強く訴える
- 病状は全て本人に話されていた
- 医薬品関係の会社で管理職として勤務。専業主婦の妻、10代の子供2人と同居。見舞いは少なく、家族のことを多く語らない

私たちが行った看護

- 交代で下肢マッサージ。約半年の入院の後半は、合計 20~23時間行った日もあったが、満足は得られず。「23時間揉んでも、揉めなかつた1時間を責められる」状態
- 30代後半のベテラン看護師が特に熱心にかかる。朝の5時過ぎから出勤(定刻は8時)する日もあった
- Kさんを中心に病棟の業務が組み立てられた

語りの変化(5~10年目頃) 無力感の時代

- 看護の評価は患者に委ねられている。無力感はつきもの
- 患者さんも好きで病気になるわけではない。出てくる症状は選べない。Kさんも、下肢のしびれが出なければ、ここまで人を傷つけなかっただろう

語りの変化(10~15年目頃) 経験を再構築する時代

- 互いに視野狭窄を起こし、強迫的になっていた関係性に気づく
- 当たり散らして、気持ちが楽になったと思っていたが、それは違う。「ありがとう」と言える人の方が、はるかに心が楽だろう
- ねぎらってくれた上司への感謝

語りの変化(15~20年目頃) 自責なき反省の時代

- 緩和ケア病棟でK氏の看護体験を生かす
 - 「いつでも来ます」ではなく「いつ来ます」
- 23時間マッサージしたからわかったこと
 - 満足はその人の中にある
- そして最大の気づきは ...
 - 顔を覚えていなかった！
 - 顔を覚えてお世話をしたかった ...

研究を通して気づいたこと 一語りを引き出した問いに気づく

- 同じケアをしても、満足できる人とできない人がいるのはなぜか
- 人生はどこまでその人に責任があるか。
どこまで人生は選択できるか

これらは看護師になる以前から持っていた問い合わせだった！

サルトル哲学との出会い

くだいて言えば、私はだれも恨むことはない、ということだ。私の身に起こることはすべて私によって私の身に起こるのであり、それがどんなに厭わしいものであってもすべて私のものである。むろん私がこの家庭、この社会、この世界にこのような者として生まれてきたこと、これは私の責任ではない。しかし生きている以上、私がこのような者として生まれてきたことをどう考えるか、これは私の責任である。

矢内原伊作(1967)：サルトル—実存主義の根本思想,中央公論新社(中公新書124),東京。

切実な問いこそが研究につながる

- 看護師は自分が看護師であることをどのように引き受けているのだろう
- 看護師であるとは、どういうことか

「看護師の実存から探る看護の本質と、それを職業として生きる意味」へつながる

両親も実存主義者だった！

- 両親は慶應大学の演劇研究会出身。カミュの実存主義演劇を上演し、父は脚本家、母は女優だった
- 2000年、父は72歳で亡くなった。肝臓がんだったが、死因は自宅での転倒→誤嚥性肺炎。「生まれるのも死ぬのも選べない」と言っていた父らしい
- サルトルは、死についてこう述べた。「毅然として処刑に対する心がまえをなし、絞首台の上で取り乱さないようにあらゆる配慮をめぐらしているひとりの死刑囚が、そうこうするうちに、スペイン風邪の流行によってぼっくり連れ去られるような例に、我々をなぞらえる方が至当であろう」

ご静聴ありがとうございました

理解するとは変わることであり、
自己の彼方へ行くことである
Sartre, J.P.

Sartre, J.P.(1960)／平井啓之訳(1962)：方法の問題 弁証法的
理性批判序説(25),人文書院,京都。